

# 近 世

江戸時代

## <時代概説>

江戸時代の野田を考えるに当たって、利根川と江戸川の役割を無視することはできません。現在、野田市域を取り囲むように流れる2つの川の流れは、17世紀前期に江戸幕府による開削工事によって作り出されました。それまで江戸湾に流れ込んでいた利根川の流路を変え、鬼怒川(きぬがわ)の西側を平行して流れていた常陸川(ひたちがわ)と合流させることで、利根川を太平洋に注がせることに成功したのです。この工事により、銚子から関宿を通して江戸川を下り、行徳の先で西に入る小名木川(おなぎがわ)を伝って江戸に物資を運び入れるルートが完成しました。

江戸幕府は、将軍のお膝元である江戸を防衛するために、水運の要としての関宿の位置に注目していました。関宿は、足利氏家臣の築田氏(やなだし)が居城し、戦国時代に後北条氏(ごほうじょうし)(小田原北条氏)の支城がおかれていました。天正18年(1590)に関東に入部した徳川家康は、家康の異父弟松平(久松)康元を配置しました。その後、7人の大名が交代したのち、宝永2年(1705)から廃藩置県にいたるまで、老中を輩出する譜代大名久世家の統治が続きました。

関宿には、元和2年(1616)、船の関所が設けられました。ここでは、「入鉄砲に出女」といわれるように、幕府への謀叛(むほん)のために武器が江戸に運び込まれることと、江戸に人質として住まわせている大名の妻子が、江戸から出て国元に帰ることを監視するため、船改めが行われていました。これは、海路江戸に入る船を改めるために、下田(のちに浦賀)に番所が置かれていたのと対応する関係にあります。

江戸幕府も安定し、江戸の人口が膨らむ中で、江戸の消費物資の供給ルートに変化がみられるようになります。家康が入部したときの江戸は、周囲の関東農村の生産力も低かったため、京都や大坂など上方からの「下りもの」で消費を賄(まかな)っていました。野田の特産品である醤油も、江戸時代前期には上方からの移入品が主流でした。ところが、関東農村でつくられた「地廻りもの」が安価に出廻るようになり、しだいに「下りもの」を駆逐(くちく)していきました。

野田の醤油は、永禄年間(1558~70)に飯田市郎兵衛の先祖が溜醤油(たまりじょうゆ)を造り武田氏に献上したことに始まると伝えられています。しかし、実際に史料上で確認されるのは、寛文元年(1661)に上花輪村高梨兵左衛門家が醸造を開始したという事例です。そして、18世紀後期には大正6年(1917)に野田醤油(株)(後のキッコーマン(株))となる茂木七左衛門・七郎左衛門・佐平治家などでも醤油生産が盛んとなり、地廻り醤油が下り醤油を圧倒することになるのです。

野田地域には、19世紀には52の村がありました。川間地区では、戦国時代に後北条氏に仕えた由緒をもつような旧家を中心につくられた集落が、そのまま江戸時代の村となりました。それに対して、目吹・野田町周辺の野田郷・山崎や木野崎・三ヶ尾にわたる南部は、17世紀の半ばに分村が進み、また新田開発で新しい村が生みだされました。こうした村には名主・組頭・百姓代がおかれ、領主に治める年貢・諸役の徴収や行政を請け負う単位となりました。とはいえ、人々は農業・林業の生産と、日常の生活を守るために、村を超えたまとまりや、村の中で組などの地域的なまとまりをつくって自主的に運営していたのです。

- <コラム>
- 関宿城と大名
  - 村の取り決め
  - 近世の野田の醤油
  - 牧と鹿狩
  - 八州廻りと野田の人びと
  - 河岸に集まる人びと

年代	主な出来事
永禄年間 (1558~70)	野田の飯田市郎兵衛の先祖が甲斐の武田氏に溜醤油を献上したと伝えられる
天正18年 (1590)	<p>徳川家康が関東に入部する 異父弟の松平(久松)康元(やすもと)が2万石を拝領し関宿城主となる 岡部康綱(やすつな)が下総・上総に1万2千石を拝領し市内の山崎に陣屋を構え、翌19年には市内の堤台に築城したと伝えられる</p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 関宿城と大名</b></p>
	 <p style="text-align: right;">大師典八十八箇所寺郷路 方角大穀図(昌福寺所蔵)</p>
慶長9年 (1604)	この頃「野田町」の呼称が使われていることが史料より確認できる
元和2年 (1616)	関宿に舟の関所がもうけられる
寛永年間 (1624~44)	利根川の大改修により現在の江戸川の流路が完成する
承応3年 (1654)	下総栗橋・関宿間の赤堀川通水により利根川の付替工事が完成する
寛文元年 (1661)	上花輪村名主高梨兵左衛門が醤油醸造をはじめ
寛文2年 (1662)	茂木七左衛門が味噌醸造をはじめ。のち明和3年(1766)に醤油醸造業に転業
延宝元年 (1673)	中根・宮崎・堤根・花井・柳沢・鶴嶋・奉目の7新田が開かれ、検地を受ける
18世紀後期	<p>関東産の「地廻り醤油」が「下り醤油」を圧倒し江戸市場を独占する</p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 村の取り決め</b></p>
	 <p style="text-align: right;">寛政七年小金原御狩之記図会 (興風図書館所蔵)</p>
天明元年 (1781)	<p>野田造醤油仲間が結成される</p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 近世の野田の醤油</b></p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 牧と鹿狩</b></p>
	 <p style="text-align: right;">醤油醸造絵馬(郷土博物館所蔵)</p>
文政12年 (1829)	高梨兵左衛門家が江戸城本丸・西丸の御用醤油になる
天保4年 (1833)	茂木佐平治家が江戸城本丸・西丸の御用醤油になる
19世紀中頃	<p>旧野田地区の醸造家が19軒を数える</p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 八州廻りと野田の人びと</b></p> <p style="text-align: center;"><b>&lt;コラム&gt; 河岸に集まる人びと</b></p>
慶応3年 (1867)	<p>大政奉還</p> <p style="text-align: right;">下総国関宿渡場祭一件裁許書写 (幸手市増田栄家文書)</p>